

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第87回

世界美術史の海賊史観にむけて (2) 文明の海洋史観を越えて

Pirates View of The World Art History: beyond Oceanic View of The Civilizations
国際会議「インド洋、海賊と美術史」Piracy, Art History and the Indian Ocean
シドニー大学 2012年3月21-23日より

稲賀 繁美 (いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

3. 交易・交流中心の海洋史観への焦点移動を

すでに明らかなように、17世紀に成立した欧州の国際法を基準として世界史を把握することには、とりわけインド洋から南シナ海の交易を理解するには、著しく無理がある。近代の産物にすぎない国民国家という枠組みに基づいた世界史構想そのものが、現実には即応していない。交易と物流を中心に地球の人類史を捉えるならば、領土国家史観から文明の海洋史観 Oceanic View of the Civilizationsへの切り替えが必須となる。これは梅棹忠夫の「文明の生態史観」を補完して川勝平太が提唱したものだが、この川勝海洋史観そのものにも歴史的な限界は否定できない*1。すなわち航空機による人的移動と電子機器による情報交換が主流を占めるようになった20世紀後半からあとの世界を理解するうえでは、もはや海洋史観だけでは万能でない。海洋史観は、確かに今日なお世界的な貿易を支配する物流に関してはきわめて有効だが、それが外交史や移民史を含む世界理解に絶対的な有効性を発揮するのは、南・西欧世界の世界制覇から20世紀中葉までの時代に限定されよう。

マルクス主義資本論の歴史地理的拘束性以上を念頭に置くと、マルクス主義的な見地から、西欧社会の資本主義発達史を範例にして全球の世界史を理解しようとする企ての無理も、改めて露呈される。マルクス主義経済学はあくまで西欧近代の経験を踏まえて19世紀後半に登場した理論にすぎず、そこで想定された金融資本の蓄積が、世界史において唯一可能かつ現実的な過程であったことは、まったく立証されていない。それに対抗する仮説もまた同様に思弁的かつイデオロギー的である蓋然性を免れないが、すくなくとも中国宋代の商品経済を西欧封建主義の枠組みに還元することは無謀だろう*2。同様に人口動態学の知見を動員すれば、速見融の唱える西欧での産業革命 industrial revolutionと極東での勤勉革命 industrious revolutionとの対比も、とても単なる語呂合わせに過ぎないとはいえない*3。人口密度が比較的到低い西欧では資本集約的な財の蓄積が発生したのに対して、人口密度の高い極東では労働集約的な財の蓄積がみられ、それが(欧米定義での)近代以前の世界の両端に位置する辺境で、中心地域の富の(近代的)再分配に際して、対照的だが相補的な解決法を見出した、というわけである。

こうした梅棹生態史観、速水人口動態学

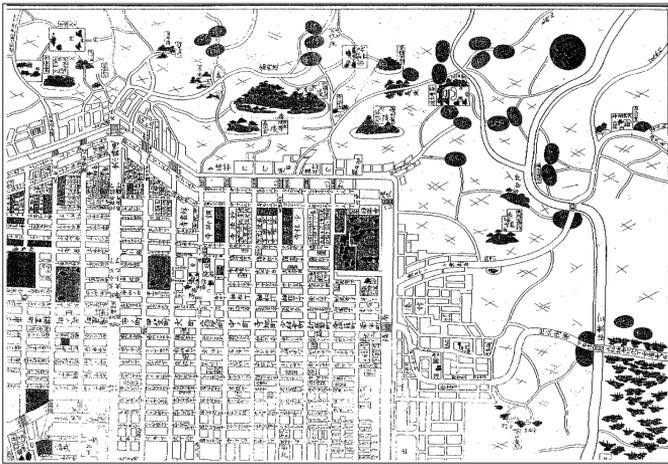
の東西対比、さらには川勝海洋史観からみれば、欧米の覇権を実現した近代世界とは、南シナ海とインド洋交易を中心としていた世界の物流が、その最辺境である西欧と極東とによって篡奪された、世界史における短い一時期（19世紀後半から20世紀前半まで）を指すものだった、と解釈することもできるだろう。

そのうえで美術に話を移す。美術史言説にあっては、特定の傑出した個人名が特権化され、その天才の系譜によって美術史が織り成される。西欧ではヴァザーリ以来の伝統とされるこの構想もまた、都市国家フィレンツェの繁栄とイタリアにおけるルネサンスという経済的因子に立脚した狭義の近代に特徴的な構築物に過ぎまい。19世紀後半に西欧で学術的市民権を獲得した美術史学とは、それ自体キリスト教個人主義と資本集約的金融体制との競合から生まれた、優れて近代西欧的な世界観の反映であり、対する極東の藝術史が、どちらかといえば無名の職人技に自足する技術工藝史の色彩を濃く宿しているのも、労働集約的な産業構造の反映とみる理解も可能となるだろう。そしてこのように東西美術を対比的に捉える視点そのものが、ヘーゲル的な時代精神論と東洋的停滞論とに寄生している。

ピエンナーレか茶道か：極東と極西の藝術分岐

ここで堺とヴェネチアとの対比を持ち出すのも一興だろうか*4。16世紀末の段階で、極東の交易都市・堺は推定人口10万を数え、その繁栄ぶりは南蛮渡来商人によって、ヴェネチアに類比されていた、とさえいわれる。一方のヴェネチアは今日にいたるまでその栄華の痕跡をとどめ、ヴェネチア・ピエンナーレの会場として藝術の世界での中心の地位を保ち、資本集約型金融市場の世界的劇場として機能し続けている。これに対して堺の栄華は、織田信長による破壊とともに消滅した。角山栄によれば、堺の富は、欧米の場合のように資本へと転化されることなく、荒廃した京都の復興に惜しげもなく投資され、仏教の寺社に吸収されたという。さらにその富は茶の湯文化に蕩尽され、不可視の文化遺産へと変貌を遂げて、今日にいたるまで、文化的な財 capital culturelとして生き延びたといつてよい。ヴェネチアの栄華はピエンナーレに受け継がれ、堺の栄華は茶道に引き継がれたのである。

明治維新を経験した世代の天心こと岡倉覚三は、ひたすら財力と物質的優位を見せびらかす「資本集約的」な欧米の美術に対



『文久改正堺大絵図』(部分)

して、質素で空虚な茶道の精神性をもって対抗した。そこには、インドのカルカッタ、さらには北米のボストンでの上流階級との交流体験から、茶を話題とする文化対比ならば英米の知識人にも通用するとの、覚三のしたたかな計算があったはずだ。A cup of spiritualityという彼の言葉が知られる。その背後にはa cup of teaという英語の慣用句の裏を搔いて、東洋の精神性を訴えようとする修辞法 (pan) が見て取れる。そしてそれは、洋の東西の財に対する価値観の相違を、見事なまでに射抜いていた。堺の茶人、千利休の自刃を物語ることで幕を閉じる覚三の『茶の本』(1906) は、世界資本主義経済史の提要进行を視野に収めたうえで、ボストンの有力資産階級を相手に、欧米的金融資本主義の物欲を批判し、極東文化史の人的資産・精神的優位を説教していたことになる。

シドニーで開催された今回の会議の主催者は、「世界の揺らぎ」を意識して、こう問うている。欧米中心主義、北米起源の理論派による世界支配の終焉の時を迎えて、はたして北米きっての理論誌『オクトーバー』Octoberのシンガポール版は将来登場するだろうか、と。しかし以上の分析を踏まえるならば、この問いほど滑稽かつの外れな問いはほかにあるまい。実際、この設問は二重に噴飯ものだろう。一方でそれは、21世紀後半においても英語という媒体による世界覇権がなお維持されるという

(人口推計学的無知を曝け出した) 認識を暗黙の前提としている。他方でそれは、自らの金融的立脚点についての無知を暴露している。そもそも『オクトーバー』の理論志向は、すでに分析した資本集約型資本主義の仇花であり、近代主義的資本主義経済の存続への無邪気な信仰を代弁しているに過ぎないからである。ほかならぬシンガポールとは、大英帝国

が資本主義的世界制覇のために築いた橋頭保であり、21世紀前半の世界経済において、インド洋経済圏と南海シナ海華僑経済圏との交点をなすシンガポールが、世界の金融センターの地位を占めることは、既知の所与なのだから。

ここで『オクトーバー』と拮抗する『クリティカル・インクィアリー』Critical Inquiryを俎上に乗せることも許されるだろうか。言及されたサルマン・ラシュディー「卿」といえば、インドはムンバイ出身のケンブリッジ大学卒業生。ブッカー賞を受賞し、いまや英語圏を代表する国際的作家だが、周知のとおりその『悪魔の詩』(1988) は、欧米の表現の自由とイスラームの尊厳との狭間で、おおきな政治問題を引き起こした。この「20世紀最後の騒書」の日本語訳者、五十嵐一(ひとし)は、1992年7月につくば大学構内で暗殺された。この事件を記憶に留めているのは、いまや30代より年配の学術関係者だけだろう。

筆者はこの五十嵐一殺人事件について、卓越したイスラーム学者であった被害者の学識に照らして、『悪魔の詩』を彼が訳した思想的背景と判断の根拠とを分析した論文を、英仏両語で複数執筆している*5。その最初期の論考は、1992年、シカゴ大学創立百年祭の一環で発表する機会に恵まれ、参加者からそれをCI誌に投稿するように薦められた。だが査読の結果は、改めていうまでもない。不採用の理由は明瞭、著名な編集長WJTMの名前で届いた書簡には、「民族誌的な内容であり、理論的価値を認めが



ヤコボ=デ・バルバリ ヴェネツィア鳥瞰図 1500年

たい」とあった。酒井直樹も述べるように、理論構築は「人文」humanitasの中心に位置する西欧圏の学者の仕事であり、そこに役立つ民族誌的なデータを供給することが、周辺に棲息する非・西欧圏の学者の「人類」anthropos的責務であり、そのみが許容される*6。「人文」と「人類」とは確然と区別されねばならない。その役割遊戯の規則に違反した東洋ネタは、当然ながら拒絶される。

同様の理論的切断は、美術史と人類学とのあいだにも存在する。ヴェネチア・ビエンナーレに招かれたアフリカの藝術家として、ガーナ出身、ナイジェリア在住のエル・アナツイがいる。昨年日本では公共の美術館で個展が巡回した*7。だが、その柿落としを吹田の国立民族学博物館で開催し、あまつさえ美術作品の隣に関連する人類学資料を展示するという方針が示されるや、北米の有力な研究者スーザン・ヴォーゲルのみならず、ラゴスに根拠地をすえる現代美術研究者、ピシ・シルヴァなどを含めた関係者は、断固たる反対意見を開陳した。いやしくも人類学的資料は、藝術的価値への侵害である、とする敵意に満ちた教条あるいは純粹主義が、彼女たちの頭脳を支配していた*8。そこには前世紀のグレコ・ロマン中心主義のルネサンス史観特有の、非西

欧未開美術に対する蔑視が、ひとつ水準をずらして、美術史学と文化人類学というふたつのdisciplinesの対立へと横滑りした様が見える。

ここに露呈するのは、「絵画」や「彫刻」ならばヴェネチア・ビエンナーレに招待される「美術」だが、「お茶」では民族誌だ、というのと同様の価値観だろう。だがこれはけっして笑い話ではない。1986年のヴェネチア・ビエンナーレに米合衆国代表として選ばれたイサム・ノグチは、岐阜提灯に着想を得た「あかり」を「光の彫刻」として展示したが、酷評に晒され、それゆえにグランプリを逃したと風評される。「あかり」ではあまりに和風、日本趣味であり、80年代の欧米「前衛美術」には不適切だった*9。さらに21世紀零年代、茶道の近代化に尽力した柳宗悦の民藝について、パリで大回顧展が開催された。だが会場は新設なったブランリー美術館であり、文化人類学・民族学から「昇格」した美術館に民藝が招かれたことは否定しがたい。会場がポンピドー・センターでもルーヴルでもなかったことに、当初、日本民藝協会からは不満が表明された。だがここには反対に、アフリカ・オセアニア「美術」と同列扱いされるのを忌避する、民藝側の「高級志向」が露呈する*10。

[註]

*1 川勝平太『文明の海洋史観』中央公論社、1997年。現時点で読み直すと、大胆だが議論がいかにも荒っぽい。

*2 日本における古典的な書籍として、宮崎市定『東洋的近世』1950年、中公文庫版1999年。川勝平太・濱下武志編『海と資本主義』東洋経済新報社、2003年。

*3 Hayami Akira, "A Great Transformation" Social Economic Change in Sixteenth and Seventeenth Century Japan, "Bonner Zeitschrift für Japonologie", Vol.8, 1986, pp.3-13. Jean de Vries, *The Industrial Revolution*, Cambridge University Press, 2006.

*4 角山榮『堺—海の都市文明』PHP新書、2000年。

*5 Shigemi Inaga, "Crime, Literature and Religious Mysticism: The Case of the Japanese Translator of Saluman Rushdie's Satanic Verses," in Manfred Schmeling & Hans-Joachim Backe eds.

From Ritual to Romance and Beyond, Königshausen & Newman, 2011, pp.45-58. "Altérité et épiphanie," *Dedale*, Nos1-2, Maisonneuve e & Larose, 1995, pp.127-142. "Negative Capability of Tolerance: the Assassination of Igarashi Hitoshi," in *Conditions of Reciprocal Understanding*, University of Chicago, 1995, pp.304-336.

*6 Naoki Sakai et al, preface to *Traces*, No.1, 2000.

*7 稲賀繁美「彫刻から廃品再生金属織物へ」『あいだ』178号、2010年11月20日。

*8 埼玉県立近代美術館『彫刻家エル・アナツイのアフリカ展 記念シンポジウム「異文化の表象と展示空間の政治学」報告書』2011年。

*9 ドウズ昌子『宿命の越境者イサム・ノグチ』講談社、2000年、文庫版2003年。

*10 *L'esprit Mingei au Japon, de l'artisanat populaire au design*, 30 sep. 2008-11 jan. 2009, Galerie Jardin, Musée Quai Branly.